

122
15
21

勇婦
繪本更科草紙

089176-001-9

122-21

繪本更科草紙

栗杖亭 鬼卵/著

〔刊年不明〕

DBM-0223



婦
博

繪本更科草紙



東 京 圖 書 館				
一 五 冊	七 二 號	三 四 架	三 六 函	小 說 類
				和 書 門

栗杖亭鬼卯著

石田王山画

全五册

更科子紙

浪華書林 岡田群玉堂梓

序

明治十年交換

信之相木氏夫妻。實為山中鹿介父若
 母。蓋有此父母而後有鹿介。世人唯傳
 稱鹿介武勇而莫知其所出之絕倫者。
 其顯晦有幸不幸也。前歲遠人鬼印啓
 遊浪華。寓居之。記其所聽事蹟。詳其
 盡矣。乃使画工馬圖加圖像以成冊。題曰



更科草子。更科甚婦名。題以此者。殊構
身艷。而勇力身。請余冠一言。余謂人
心固有四端。而不知充之。必如聖教何
哉。是故苟可數四端以導善。則雖得官
小託。亦足以助教邪。况斯編所記。壯士
烈婦。實希世之仇麗。而志必忠。操必貞。子
載之下。令人心感動。砥礪焉。且以如鹿介

武勇。自由出也。然言不文。豈不亦還奉辭
不巧。則不足達意。是作者之所竭力已。
若夫近世俗間所行。談士之雜記。怪力亂
神。聖人所不語。奇事異聞。伸寸力尺。其
譽。詆譭。虛飾。失實。則為斯編者之所不取
也。梓而行諸世。何不可之有。

文化素未盡夏

葛波山人



自序

顔氏曰上智不教成宜成哉三條の菅代彦
 丹多の海意よ一ツの小説と海とつれども是と筆
 頭ふ成と暇たり一日予ふいつく赤腹中
 母を以て稽顙なり足下其趣を待たむ人や若くは
 一夜茶菓を招く招く夜話せんといふ小言
 も茶菓の一をみ蹠ぐん茶を白きたわに津
 机より欠くおや多岐がうらや三條の家よりお話
 せむく時々戻る雀に彼亭をむりぬれあはれ
 嬉しくお約束茶飯煎菓子菓子お話し出よ

松尾の音ふる人やきく人々襦袢志のこ
 小女大音を説く勇夫の手ふ野子の懐と
 述婢人の甘き女を禁むあはれ何と云やが
 漬のてんもんどもいれぬ趣向が感心の余り
 予も席屋のいりに俵の腰のらんどく彼合
 世作考れ粕とを喰ふも世もあはれ海に流る
 十の作意もあはれは是れ他是と法自宇治の
 の大に白紙なり。新を画し書しつれは

文化七庚午の春

遠州小夜中山禁

栗杖亭兜卵誌

目次

卷之一

相木森之助が由緒の話

更科森之助が億病を憤る話

牧島大九郎狼藉更科勇力の話

卷之二

更科再び危難森之助勇猛の話

相木森之助甲州へ引渡る話

卷之三

相木森之助死刑に達する話

更科夫の死骸と葬并幼子と失ふ話

相木市郎兵衛の話

卷之四

更科不量山賊の徒小成る話

横田道安加賀國菊酒屋小仕の話

於菊幸助加賀國と立退話

更科讐言以復る話

鴉勘左衛門本名と明る話

卷之五

更科再び森之助に逢ふ話

森之助幼子と得る話

森之助甲府を辞して遠州へ趣く話

森之助井上九郎小逢ふ話

目次畢

余之腹內甚田于一石頃者喫茶不計
 烟出此石玉工鬼卯子見之為璞
 持去而切磋琢磨以成真玉其光
 赫之寶貝可照十丈來余怡出望
 外雀踊之餘終喚毛公記其事
 是則完璧永燕乎

文化辛未夏 三條茂依寫



馬場美濃守



仁者必勇 以足于城
 甲之諸將 誰比其名

甲國為囚日
英雄感動人
誰知看鮑叔
不敵殺忠馬



相木森之助



更科娘



艷妖兼勇武
 擇配得良雄
 烈志如金鉄
 侵凌危險中



此者
福多也

千金蔽
錦帶羅襦
春情不已
誤走姦夫



於菊

姦之又姦
終不肯
身首分
天鏡自知



鑿道安



牧島大九郎

全勇婦繪本更科草紙卷之一

遠州小夜中山麓 栗杖亭鬼卯述

相木森之助由緒の活

漢書曰三公非其人則三公為不明
 後奈良天皇の御宇天下大よき
 京都小在セども國々蜂のぶく
 今川北条北國武田上杉村上
 諏訪の輩たぐいよ蝸牛の角乃
 天地始りよりの大乱未を
 治世とな念ふくもり
 上九衛門尉義清とりよ入り世
 源家の嫡流也

信州の城下
繁栄の圖



強勇の大將小どらける家臣ハ染岩寺右馬之助井上
 九郎光貞綿内左内左門相木市良兵衛牧島玄蕃など
 一騎當千此人傑なり義清を補佐しけき勢大
 ろらんして殊小笠原諏訪木曾の大守小睦とたがひ
 勢を助もまは駿州の今川相州の北条むど北国の地と襲
 と事とまはく志むらく静溢ふりて義清の家臣相
 木市良兵衛いさう主領しむる事なり蜜小国と立退
 甲州の武田大膳太夫晴信ふ降りけ是より先信虎乃
 代より村上と武田と不快なりまきば強く義清是と怒り
 たびく合戦らるといども武田方より武勇絶倫の輩多
 くいりも敗北なれどい無念の月日を送らき多此家光染

岩寺右馬之助が娘より更科姫より世小希を以美人なり
 され姿乃艶なる事いへの西施楊貴妃をその我朝
 の衣通姫小野小町を面びるげはりれ容色より三つも
 カ飽まき強く能千金の鼎をわけ剣術ハ同家中小間
 えまは井上九郎光貞乃門人小此更科よづくも
 けは父右馬之助を一人娘にけやりに万夫不當乃勇
 けまは又なきものといつくり心の依よ育け此娘十六
 才ふもありまきど所より婿婿の事と言ふはけき
 更科心ふれしや我女ふこと生きたし君の五大喜ら
 いとれも一方れ大將ともうまらんとす何ぞ疎
 なる男と一生男と守らぬはばに英雄豪傑より

んが夫とともを油とぎと心よおとめをまきば父よこかくと
 いし終ふ返事とせぬ打とぬ多ね愛ふ先年国と立退武田
 家へ降参せり相木市良兵衛が甥は相木森之助幸雄と
 つもこれあり今年廿一才も顔色美玉のぶと威有く
 武うらば終に怒りばらうハセー事ふー叔父市良兵衛
 が降参を諫うまご用いざれがやひ唾を得ぞ其身ハ信州
 小とゆり忠臣無二に仕へけぬまご義清ハ叔父が不忠
 と怒り森之助ともおわく用いざ平士ふりて年月を送
 りける其頃村上の家中心に誰いよとま相木森之助ハ万
 夫不當の勇士なりと沙汰たやまごも誰ありく其振
 舞を見り人もうらう孫ども執權ふけぐ井上九郎はゆ

更科

森之助ハ信州一れ豪傑なう人と称美一々右馬之助
 が娘更科師の常は森之助を英雄ありこのまふと心
 憎くおとしい其人と見やと心がけぬまご森之助ハ叔父
 の不忠を恥し閉籠り兵学のこふ心で委落まき其入
 と見ふ事さへなう月日何送りけぬよ或日井上九郎
 森之助を伴ひ右馬之助ハ對面せん事を頼ぐい多ハ
 右馬之助も娘が師匠あまきば真に通ト且森之助をも
 呼入對面一寒暖と述べぬ井上九郎声といそ今
 諸国糸のどくそまし我國もたびく晴信もまきと交
 とくも仕出ー事もふく無念の月日とわくはも
 實ハ太守の旗下ハ英雄の士なりゆゑなり我諸家中



さうさ内何小不足か死男ふりおとくれば大か掛想一師
 の仰乃ぶとく此人真の英雄なりが承夫おかた人の森之助
 より外よをちららと頻小意この情をおこ一密井上
 の亭ふきまかり師よ其事を言出さんとよお恥う一く
 胸ふとぐり魚赤らうふなうばうらぬ言も出さず帰るけ
 るいつちやみくに其人の併立添い夜もさぐら寐もあぐりけ
 懂さうさぞ言いぐやまおんも本意お一とやおとひけん
 此事ぬと小認師のよと入贈りくる井上九郎のよ更科
 が用なりげよ来ア一が何事も言さず帰り一をさう海憎く
 れとひ一に支のきりけれを不審聞き見まじ相本森之
 助真の英雄とおぼ一りやご君媒とかり家を森之助が方へ

送やうのきと書くれ井上いけりてきたり来ア一趣
 意とさく扱と先日同伴のせの森之助と見さ一
 ちと盛一きう一是幸の事なり森之助忠を思ふと
 ついとも主君とまごいふと終ふ此国と去らん計
 が一他邦より此人と用ゆるとれた虎と竹林に放る
 がぶと一右馬之助が聲とわ一置ば足と繋くは屈竟
 の事なりと即事返事をさくかかり一人かきら
 きたる我れふとくんと言やと扱右馬之助が方へ
 来ア四方山のよあ一れ序森之助が忠臣且英雄と称
 一更科姫の聲よふふ一うめくといふらんと裏と人
 右馬之助うら笑ひ厚情厚くハハハも去さぐ娘美を

存知の通り幼年より我侘ふころ生得武邊と好
天下乃英雄うごでハ嫁をまどりと日頃廣言と放ら
殊ニ森之助ハ君のたうたがひあつて一者ふはハ如何
やうんとつゝへけまば井上膝よりよきとせんが今天下悉く
乱まき豪傑時とえぐる時節なれば森之助がよき人傑
と用ひたるとんハ終ふ他邦よまらん其時悔ふとも詮
ふくべ一息女と疑とふ一當家ふ置とれたハ時節至
らば駿群の高名せんこれハ彼等ハ殊ニ息女森之助
と掛想一まふやと家よく知るゆゑふ媒下へと来り
せり思業一多くと勸めまれば右馬之助も相木がハ柄
事と慎と勇気をたうたうたがばおと奥ゆり一くせふい殊

娘が意慕とくくくくまば幸の事なり君ふやて婚姻乃
事ハ足下ふまう芳はつゝとたうけまば井上もよ
よ強こい早速森之助と召さう此事と語らまれば森之助
きば一沉吟一う厚志かたどけうたはども當時當家
一の人乃息女日げ者れ某ニ替れあらん事天地雲泥
の縁とア一愈一かたお粗語の縁談の縁とたはハ不量火の
るもれふはばいらふは免とてと存せし一と辞退一とまれば
井上も彼が遠き慮を感とられたも足とほるの謀えん
ハ打もくひかろくび足下鄙下なる事うまき息女ハ信州
第一の美形殊ハ大力勇猛の婦人足下と掛想一と手
媒とたのむくは仕合の事やちか誠ハ男子ハ望む可

つらどやとさふぐ言こーくえんれハ森之助もいまどぬの
 いたふとつらぬぬちちまきば九郎無理ふ得いふあ右
 馬之助ふかくと通トしむ娘より後とび大くうらば
 九郎とむこぶの神と拜とまめあむおこしむれ夫より義清
 ぶふかくとやて井上九郎が嫌みう西家誓姻をやつれ
 幾万代と契と多れ

更科森之助が億病を憤る話

頃ハ天文の末武田晴信朝臣の武威旭のむがくがおとく
 けしも強勇の聞えつる小田井又六郎兄弟と一時責
 ほるがー諏訪頼茂も殺害せしき其家亡び木曾の丸馬
 之助も近ごろ和をもとまきば村上義清今ハたのむ木陰

雨漏く詮方にもれハ降とくくおとく志づく音信
 と通トれ晴信朝臣も山本勘助が諫と隣国の
 小のり合に心とけくふ事なりハ天下平定の朝
 おとくいとらるしゆ急義清が手指とぬとりの事
 思ー越後の上杉輝虎との大敵なりと防禦嚴
 甲多ぬ爰ふ村上が家臣牧島玄蕃が弟小大九郎と
 りよものあり悪う右馬之助が娘更科ふ心をけ人を
 こととるく言ふーとくれもいへん判森之助
 がおへ嫁ーとまき本意なり事ふおとく忘まんす
 お跡より悪の責来まさせ免う其人のそがとなり
 見く悪やと森之助閑暇ふ基と聞とくは是幸と

折ふ一ハ音信く甚だ打ましの更科が姿と見らぬも
 たのーみるくよく癒ふ身とやのー不牛悪念と主ト
 何とぞ森之助と害ーむむ心ふまぶ事もつく人りと
 先年亡びー小田井又六郎が徒弟又八と云ふカ宛ま
 ほく銀術の達人なり多分が小田井討死のよりハ武者
 修行ハ出跡うう其事と云ふと云ふもせん方ふけま
 牧島玄蕃とも由縁らやうれよく食客となりてゆと
 ひとうふ招き謀を授け折ふ一ハ森之助が方へ伴い俱
 甚と聞とく或日二人来り多きハ森之助も幸い閑暇
 うりと甚盤と出ー甚をはトめたるは大九郎が謀と
 又ハ小助言うも森之助ハ十分怒り起さる刀を抜一め

又ハ小森之助とくせ其場と立退せしむるば魚小更科と
 妻小せんとどユとけふ夫もさうと甚小打入ー時又ハ
 大九郎へ助言ーけりゆゆ森之助肩よりうれと何の怒
 一ー体もなく又打うと云ふ此度ハ又ハはトめ
 助言ーこれと森之助ハ自若とー構くハ今ハ又ハ
 半ゆりうの森之助をくく白眼とく不甲斐又さう
 腰抜く武士の助言をさると咎もせび嫌はーぬぐいと
 二番さう員る事体この兎かーありかやうれもふ附
 合ふふあはど帰とく人と言ふ由甚旨と取も森之助
 顔へくくう付まバ基石ハ四方へ散乱せり今ハた
 うのう又ハ抜かりん柄小手をうけまハ大袈裟小打放



更科大九郎又八

天九郎

うんと鯉口くわらげ待たしど森之助いさづふの基石は
 拾ひよ勢やうら基をこけもろくひと基盤を
 傍へ直とめぢ兩人をちまうの詞も出に手持不沙汰ふ
 帰るけお妻更科を此体をとれけけより詠め居るが
 うらへう保く長刀の鞘をとげ一玄閑へけ出るは森之
 助あうと抱とら汝狂気む一せ一何事とさるどとあ
 かけくき更科ハ猶せれたら我夫とめめなけお不願の
 悪漢長刀よりけも辱とともづんと猶も馳行と引戻し
 有倫絶者あまも主人の家来うぞとて女不と駱し
 きとのハちとと長刀引取との所へけめれた夜ハ果まぶ
 ひう見えどと三輪の諷をうひまふを更科ハちまう忙れ

てそのさ言とびらり多かづ夫の心とてかりうも深き思
 案もあるやうんと涙をこしぬぐひ部屋か入る其夜夫の
 気色と伺ふは何の事もう平生体たけハ扱ハ翌の夜
 意恨をうらうらんと待も終ふ其沙汰ハなまきハ
 さてハ人のうらふ違ハ真の英雄めやうらうらと疑ハ
 と生ハいろく怒ハばこ一ハ様一見もど終ハ怒ハし
 体を見びそれと常ハ机上一と七書三略の兵書と置く
 昼夜熟讀する体たれハ心迷ハて暮ハる或日森之助
 近所へ出くうう日の暮ハ至る帰らび更科ハや一ハ
 不用の所ハ長居する人ハうらび何ゆゑやと家長
 邊惣内をむいふやうんとその所へ顔色ハとちまう帰る

まじく更科ハ心を痛め平生とちづい遅く歸らせまふ
 えりあふふ顔色のちやく見えゆく途の中めりぬ心
 あくくねとせしやと想内を移るもまきの涙もあは否た
 おちるば今日氏神泰治の歸り道よく甲斐侍と思へ
 きよのせ八人向ふより来りてふ又と叫ぶより上方武士
 と見えしとの四五人行ちづいづに錯ちたりと言
 上り双方接合せ戦ふゆゑ家ハ森のふげみ隠きと暫
 くはちづきといひ果るまきも見えざればやうく二里許
 ぼりの道一より歸りたり互ふ切つまきとさけり鮮血不
 どばしや目もらてらまぬるゆゑ積気と一歩とそれ
 由道も墓取どやうく歸りて大息絶えり斬り

多きハ更科けりめく夫の億病なる事とまう忙然とて
 りけりたあしぬ体とも葉なごりて一間に入置
 らしつとくと思案ともふら深窓よりけり
 より天下の英雄と夫おとんと廣言と吐森之助殿
 豪傑と世上のうらまよ其人と見まほしく垣間見
 けお形の美形お心うはり且ハ英雄とわらひつる
 さまぐと心と尽し嫁入せり甲斐なくかく億病人
 ならんふ此事世上へ聞えたり右馬之助が娘ハ口
 かどももちりば森之助が器量ふらぐさき日本一乃
 億病人の妻とかりと云れんを我むうりて恥辱
 おあしり父上も不吟味のそれとふむらうらひ

東海道傳卷之一

事何方口と下き事なり。されど女ハ二人の夫とりのば
 恥の第一とてさるる事なれば今さう二夫おまひゆるさず
 りふおかりし此うへ氏神ハ幡宮へ祈誓とつけ奉り
 と夫は授むと百日歩行とてさるる事なれば納受
 らんやも一此福がい叶はば奉命を絶ふと祈らん
 と一心おおひつゝ翌日より赤治せんと心ふこめ
 牧島大九郎狼藉更科勇力の活

牧島大九郎狼藉更科勇力の活

かくて翌日更科ハ森之助が前より歩くハ幡宮へ百日の日
 赤のよりと祈るは多も相本も女のいふ事ハ思入
 ども社赤の事ハいふ毎もあらん其日より渡邊惣内
 とつは日毎ハ氏神へぞ詣り此より牧島大九郎ハ

聞き大いよろこび承森之助と討り更科と妻おま
 と溝をとりけしに彼が堪忍つよれよやむと得ん
 彼が方へ四くともう叶とび心をいふ何ぞ討らん
 更科氏神へ日赤とるる天のつらへり途中より待
 伏しう彼と棄し赤之助ハ鼻ゆせん屈意り武
 士十人むりかへし更科ハ大力のきこえあまじ
 うのいふまふがきしと小田井又ハと人當十とな
 赤の傍に幕うちまはし今や来ると待ちけりめ
 事ともさるる更科ハ渡邊惣内ハ中間一人め
 いのものごとく日赤しくく頃ハ天文廿年卯月の
 うれが信濃路ハ今とさるる櫻の咲ちり散りけり

うらやうゆと雪うとあやまふれぬまは氏神へ願言一も
 さむし木蔭ふ立ちより彼のうらより花と詠う由寛か
 天人影向らさるるやと心るれ宮奴どもも涎と流し
 其人と目がきせば詠りたる牧島大九郎時か一もや
 ねりいん暮の中よりつと出更科か手とより君は覺
 ひんいまま右馬之助を方ふひき一時より志心さく
 づくがれ人とりく入ひへども難面返すうさく判億
 病無双の赤之助が方へ嫌一も一事のうらりこよ先日
 赤之助とはうり又八小討せ君を赤手ふ入人と口論は
 させし一億病者の赤之助相手ふりしは手持りく
 歸り其後と君と見る事さるる命ももゆるはうり

意暮むし結の神け捨りひ頃日日参とけりり
 と潮より飛立どくくもとくより爰も待りけり返り
 うもさるり假令いささうも無理も本望とらげ
 ほりうきんと其用意もいささき先く幕の中へ来
 りえと引立行人とさるは渡辺惣内大少怒り當時
 出頭第一の牧島氏の舎弟さるる余りら傍若
 無人のふりまひる是と相木赤之助の方室主のふ
 てはびや比籠しうみりと引とけんところを大九郎から
 くく笑ひいさささる倍臣のふ才さるる過言千可又八
 らき引退しし争りれど幕の中より雲突ぶれた七の男
 のさづり出惣内と小鬼のどく傍へ投りけり。ふれり



更科氏神へ日奉の道
道ゆく大九郎復讐人
大九郎



更科心二十一合の怒アと發るくくも婦人のたしき
 も爰かりと會釈しつゝ志のほどいふれいれど
 今ハ惣力ガチバよく赤之助グ妻小付まいは返るあり
 ぐーゆらせまへと恥ーげふ立退バ大九郎ハよく魂
 天外ハ飛人づいづいさハ宣ふや赤之助ハくがハ者
 の親類うれい江道出されんもまきぬ奴らうらら我
 にかむきまへ無理ハ手と取り引立んとともふ金輪際
 くりへぬいふるむく敷ハバ大九郎心ワうち又ハ引立よ
 と声よりこやくいざあんと立寄とろと引相んが二三間
 投付まバ狗子のぶく遙の谷へこけ込ぐりこハ曲者ごと
 幕の中より十人どりどりくくと立出我組とらんときほい

かゝるを人研ふくくマくと投付まバ今ハ大九郎たまり
 ちハ太刀引拔ち切てうらら引こめてカミだせや
 腰骨ハおがえよとらハ打よマうくと打まバ大カハ
 はよくくく目くらめくく絶入る此勢よおそれん
 十人むりれ悪漢と蜘蛛の子とらうとがごとく何国とと
 うく逃まけぬ相手ひらきまバ姿うつらぬい惣内様でよ
 とまげくと見えへもせだ立帰る惣内も始婦人
 の快カと見ろ舌と巻る帰るハ体わくて赤之助ハい
 つもより妻れ帰る遅れバいと門外へ出て見や
 所へ供の中間息と切立帰るまきぐのよと述べ
 赤之助大カねどらまきぐる事のあらんといふ一年どの

東海道傳卷之十一

惣内と供ふはき置れば幾重も佗言して帰らんと
待うち主従無事小帰るれば次之助も清こび始終
のやうにと尋ねれば惣内大九郎が狼藉更科が強勇
落もぢくかたりまきまきば次之助ハふとあつた息をつた扱
く婦人の力りうんハ世のさうりものなり何ぞ討らんか
災と引出さんか牧島玄蕃ハ殿の近臣共弟ハあつた
無礼なりうんハ更科ハ我方小置るうんやう右馬之助
方へ送り猶も惣内付そい門外へ一寸も出さうれば舅
ふも巖鋪門外へ出さうふまこトトふかかろうん
以の外怒るともれば更科ハ思ひもようば泰手柄と夫小奉
らさんとねいハハ常小かりう夫の怒らふ婦人の身ハ

かふーさハ泣く右馬之助が方へ帰るれば惣内も其う
へ小まらうい次之助が口上は述べれば右馬之助且ぢらう
且娘が大膽と怒り玄蕃への言訣ふきむく一間
押込せきける大九郎ハやうく心附又ハ谷底より這
上り互ふ魚を見合とぞく帰るれば家なせー思
事なれば無念まづ沙汰まーにらう

繪本更科草帛卷之一終

122
15
21

